



Title	技術報告：北大農場における乳牛100余年の歴史
Author(s)	岩倉, 隆
Citation	北海道大学農学部附属農場技術業務報告, 1, 100-102
Issue Date	1997-04
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/14504">https://hdl.handle.net/2115/14504</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_100-102.pdf



## 北大農場における乳牛100余年の歴史

岩倉 隆

北海道大学農学部附属農場畜産第二部

## 1. はじめに

私は、昭和40年より見習いとして乳牛の人工授精を始め、44年に人工授精師免許を取得、45年から本格的に繁殖管理全般を任されることになり現在に至っている。当時、種雄牛の系統譜はパンフレット等で明かだったが、雌牛については、個々の牛の体格や泌乳能力等の漠然としたイメージが頭にあるだけで、北大農場の乳牛の歴史についてはほとんどは知らなかった。先輩諸氏から、北大農場の偉大な牛歴について常々耳にし、また、乳牛導入当初からの牛籍簿その他の書類も保存されていることを知り、人工授精師としての好奇心が沸き、北大農場の乳牛の歴史についてまとめてみようと考えた。今回はこれらの一部を紹介する。

## 2. 北大農場におけるホルスタイン生産の歴史と意義

我が国の主要地方にホルスタイン種牛がアメリカ、オランダ等から初めて輸入されたのは明治22年(1889年)のことであり、その1つが札幌農学校第二農場(現 農学部附属農場畜産第二部)であった。北大農場のホルスタインの歴史は、アメリカから輸入した種雄牛2頭(和名:秋津島,大和)、雌牛3頭(和名:敷島,漣,千鳥、系統図参照)から始まった。以来、100余年にわたり1000頭以上(雄も含めると2000頭以上)の生産を行なっており、この様な例は日本の乳牛飼養の歴史においても唯一であろう。これら牛群を核として生産された雄牛および雌牛は、明治、大正、昭和を通じて、全道はもちろん全国各地へと種用および乳用牛として旅立っていき、それぞれの地域におけるホルスタイン種乳牛の改良に大きく貢献した。その中でも子孫に抜群の能力を発揮した名牛を紹介すると、種雄牛ではキング ヒズ ホンヤーク ルト、姉 ホンヤーク キング ルト、キング ハンドリック、ハンドリック キング ノブがあげられる。また、雌牛ではクイン ハンドリック ノブ(244号)が、大正12年に6.5才365日搾乳において14,250kgという当時にしてはきわめて高い泌乳能力を発揮したという記録が残っている。子常(193号)は、緑(220号)を世に出し、現在でも「ミドリ」の系統は全国各地にいるようである。平成4年7月、静内町の伊藤清治氏より「ミドリ」の子孫を寄贈していただいた。氏は昭和20年より、この「ミドリ」の系統を導入し酪農業を営んでいたが、離農することになったため、大切に保存していた3頭を寄贈していただいたのだった。繁殖改良過程の違いはもちろんあることながら、一般外貌、性質等は、北大農場で飼養している「ミドリ」の子孫と似ているところが多いのには驚いた。

## 3. 北大農場におけるホルスタイン生産と教育研究との関わり

現在の北大農場は、ホルスタイン種乳牛約70頭(内搾乳牛約25頭)を有し、年間に30~35頭の子牛を生産、150~180トンの牛乳を生産しながら、従来からの系統保存もさることながら、学生・大学院生の教育研究に濃密に利用されている。教育面では、「農場実習」(農学科他)、「家畜生産実習」および「搾乳実習」(畜産科学科)を行なっている。また、卒業論文、修士・博士論文実験の場でもあり、現在進行中の主な研究テーマをあげてみると、昭和59年度から継続して行なっている「牛乳生産における自給粗飼料利用と生産効率に関する研究」および「自給粗飼料主体による乳用雌子牛の育成に関する研究」(畜産科学科畜牧体系学講座との共同研究)がある。これらの研究の特徴は、単に乳牛個体を研究材料とするのではなく、生産システムをも対象とし、基礎と応用の結びつきを重視していることであり、全国の大学では例がないものと自負している。また、獣医学部との関係も深く、特に繁殖管理面において、昭和58年度から家畜臨床繁殖学講座のカリキュラム外の実習として、発情徴候のチェック、分娩監視および介助(4年生)、人工授精、妊娠鑑定、生殖器関係の治療(5年生)等を広範囲にわたり分担して行なってきた。

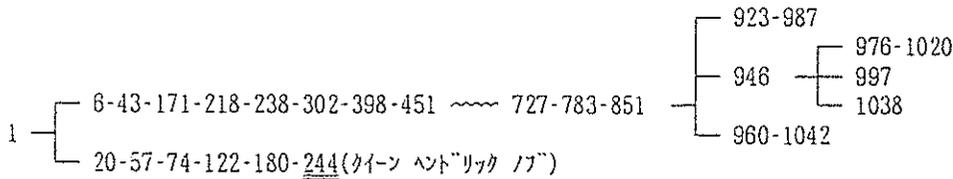
このように、北大農場の乳牛群は、生産ばかりでなく学生・大学院生の教育研究に非常に重要な役割を果たしているが、わが国におけるホルスタイン種乳牛の改良に大きな貢献をした貴重な牛群がこれからも末永く、遺伝資源として保存されることを願ってやまない。

【資料】

北海道大学農学部附属農場畜産第二部  
ホルスタイン種雌牛系統図

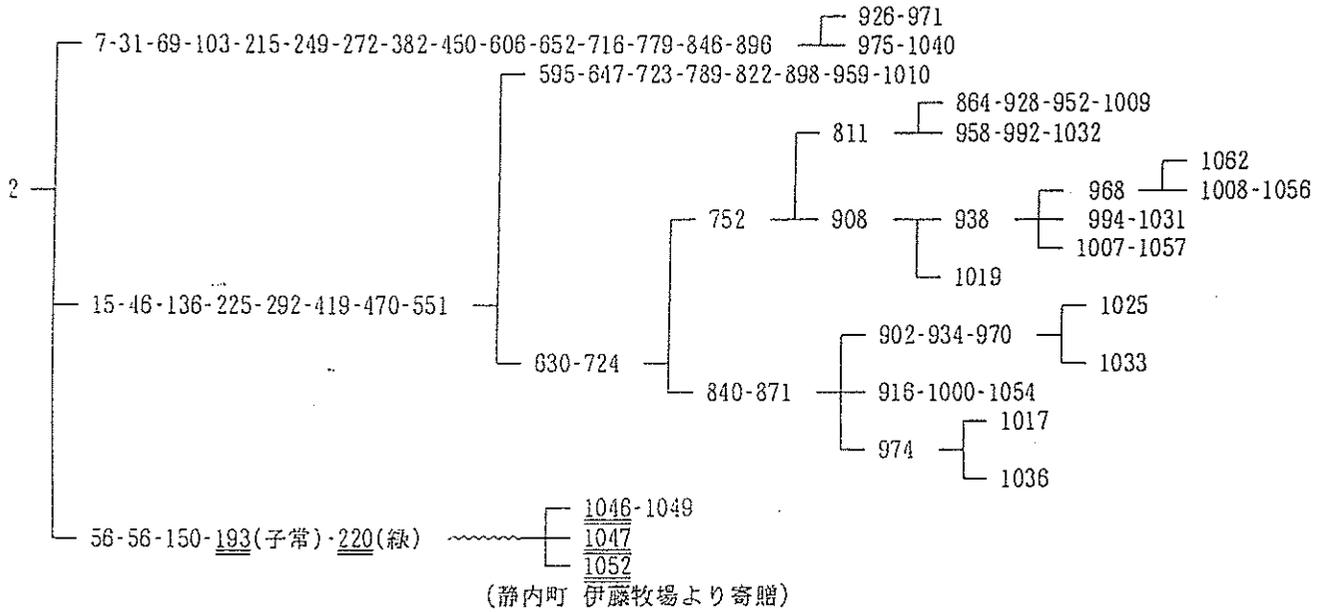
牛番号 1  
 名号 敷島  
 生年月日 明治21(1888)年2月25日生  
 父 オリンピオ NO.1157 N.F  
 母 プリズマ NO.5530 H.H.B

敷島系



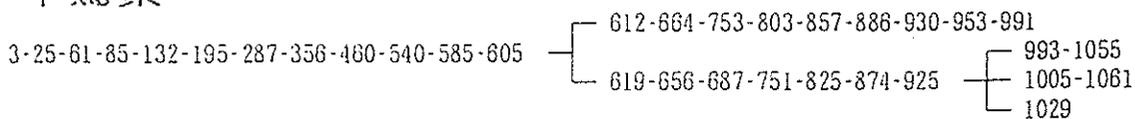
牛番号 2  
 名号 漣  
 生年月日 明治21(1888)年4月2日生  
 父 スミス コンケラー NO.3068 H.H.B  
 母 プリズマ NO.3068 H.H.B

漣系

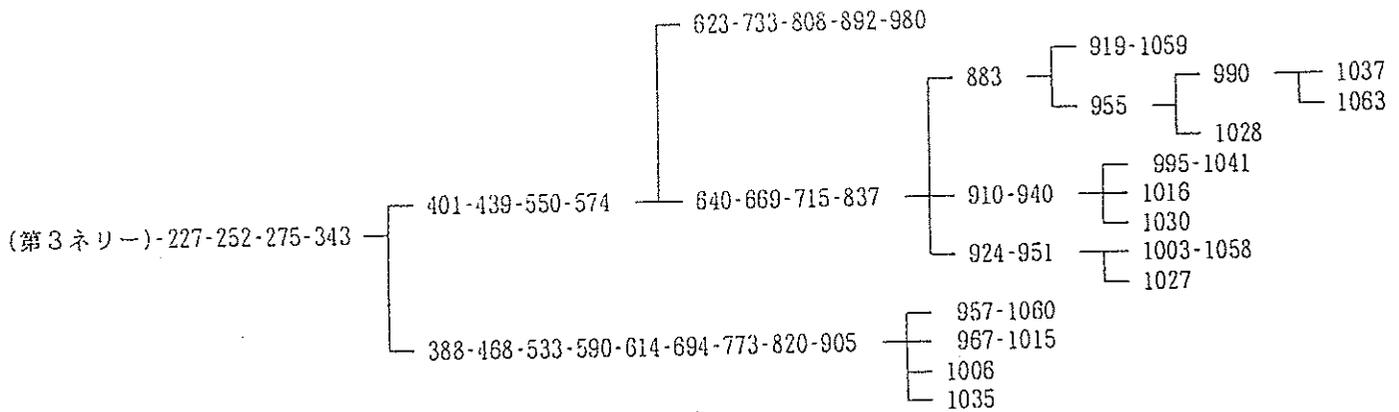


牛番号 3  
 名号 千鳥  
 生年月日 明治21(1888)年5月30日生  
 父 ネザーランド NO.1852 H.F.H.B  
 母 NO.3007 H.F.H.B

千鳥系



第3ネリー (大正7年月寒畜試より保管転換導入)



泌乳量及び繁殖関係年間成績

年度別	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	
総泌乳量, kg	165,896	140,026	147,023	147,961	156,842	174,978	185,860	158,494	152,040	180,411	
平均頭数	23	21	23	21	24	23	25	23	25	27	
一頭当り 平均乳量, kg	7,084	6,765	6,520	7,049	6,470	7,503	7,370	7,000	6,151	6,782	
受胎率, %	73.2	83.8	85.3	69.1	79.5	84.3	70.5	75.0	68.3	59.3	
分娩間隔, 月	14.4	14.4	16.3	16.1	13.4	14.2	13.1	13.1	13.3	13.1	
生産仔牛頭数	雄	12	12	12	11	10	17	16	16	14	17
	雌	13	9	11	10	16	11	23	13	15	24

1890-1982生産仔牛頭数: 雄 832頭、雌 894頭